

肺がん手術について

発見しづらいがんだからこそ
定期的な検査がとても大切！

この先生に
聞きました！



福岡青洲会病院

呼吸器外科部長

阿部 創世 先生

Sosei Abe

Profile

山口県出身。福岡大学医学部を卒業後、福岡大学病院や福岡東医療センターなどを経て、2022年4月より現職。日本呼吸機外科学会認定呼吸器外科専門医、日本呼吸器内視鏡学会認定気管支鏡専門医。

喫煙指数が高い方や
家族歴がある方は要注意

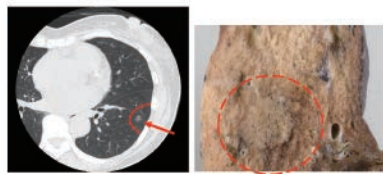
今や日本では2人に1人ががんを患い、3人に1人ががんで死亡すると言われる時代。同病院の呼吸器外科において、治療を行なう主な疾患は肺がんだが、肺がんは日本で年間約13万人が罹患し、約8万人が亡くなる、がんの中でも最も死亡数が高く、今なお治療が難しいとされている。

負担が少ない低侵襲手術を採用

「早期発見・早期治療が大切ではあります。肺がんの症状は風邪や気管支炎などの症状と変わりないことが多く、特に早期の場合は無症状でレントゲンにもはっきりと映らないケースもあり早期発見されづらいがんの一つと言われています」と、阿部創世先生。肺がんと診断された場合、手術の対象となるのは全体の約1/3程度だが、近年は低線量CTの普及に伴い、1cm未満の小さな肺がんが発見されるケースが増えているという。同院においても、低線量CTでの検診を受けることができるため、喫煙指数が高い方や家族に肺がんの発症歴がある方は、定期的に検診を受けておきたい。

一方、同院では、内視鏡（胸腔鏡）を用いた低侵襲手術を積極的に取り入れている。「一般的な胸腔鏡手術は、胸部に4、5カ所の穴を開けて胸の中をモニター画面に映しながら手術を行なう多孔式胸腔鏡手術を行ないますが、手術による患者様へ

早期小型肺がん



同院では早期発見の小型肺がんの場合、患者の身体への負担が少ない低侵襲手術を行なうことが多い

の負担を軽減するために、当院では4cm程度の穴一つのみで手術を行なう単孔式胸腔鏡手術を取り入れています。痛みが少なく、術後の回復が早いなど、単孔式手術のメリットは大きい。糟屋中南部医療圏には、このような手術が可能な呼吸器外科のある医療機関がなく、かつては福岡市や飯塚市など、近隣の病院を紹介していたとか。「離れば離れるほど、家族の負担や退院後の通院が大変になります。糟屋郡内にも当院のように専門的な検査や手術を含む治療を受けられる環境があることを知っていただくと嬉しいですね」。

肺がんで大切なのは、治る段階で発見すること。そのために必要な環境が、ここにはある。

Hospital Data

福岡青洲会病院



〒811-2316
糟屋郡粕屋町長者原西4-11-8
☎092-939-0010
<https://f.seisyukai.jp>



WEBはこちら

診療科目

総合内科、外科、循環器内科、脳神経外科、整形外科、脊椎外科、呼吸器内科、消化器内科、糖尿病内科、腎臓内科、脳神経内科（神経内科）、消化器外科、形成外科、乳腺外科、呼吸器外科、泌尿器科、眼科、リハビリテーション科、脳神経リハビリテーション科、放射線科、病理診断科、救急科、麻酔科

診療日

	月	火	水	木	金	土	日
8:30～11:30	○	○	○	○	○	○	—
13:00～16:00	○	○	○	○	○	—	—

休診：土曜午後、日祝日

※急患の方の受付は24時間365日

脳血管内治療について

脳血管疾患は時間との勝負！
迅速かつ適切な治療が必要

この先生に
聞きました！



福岡青洲会病院

脳神経外科部長／脳神経センター長

堀尾 欣伸 先生

Yoshinobu Horio

Profile

福岡市出身。熊本大学医学部を卒業後、福岡大学病院や関連病院に勤務。2022年10月より現職。日本脳神経外科学会専門医・指導医、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医、日本脳卒中学会認定脳卒中専門医・指導医。

麻痺や失語の症状は
迅速に受診してほしい！

日本人の死因の上位にランクインする脳血管疾患。これまでは有力な治療法とされる「脳血管内治療」が可能な病院が糟屋郡内にはなく、福岡市内の医療機関に搬送せざるを得ない場合が多かったという。「脳梗塞や脳出血、くも膜下出血に代表される脳卒中は、症状が現われたら速

専門的な診察・治療ができる体制を整備

やかに受診し、いち早く治療を行なうことが大切ですよ」と話すのは、22年10月に同病院の脳神経センター長に就任し、脳血管内治療を開始した堀尾欣伸先生だ。

「片側の手足に力が入らなくなったり、顔面の左右どちらかに麻痺が起こったり、失語の症状が出たりしたときは、しばらく様子を見て症状は改善されません。このような症状が起った場合は、急性期血栓回収療法の適応となる可能性が高いので、すぐにこの治療が可能な医療機関を受診する必要があります」と、堀尾先生は言う。

近年、同病院では専門的な検査や治療を常時行なえる体制を整えており、なかでも力を入れているのが、急性期血栓回収療法である。「15年に世界中でその有効性が報告されて以降、ここ数年で飛躍的に治療数が増加している治療で、脳の血管に詰まった血栓をとる方法は、①血栓まで太いカテーテルを持っていき吸引する ②ステントと



最新の血管撮影装置であるSIEMENS社のARTIS icono D-Spinは2023年4月より稼働予定

いう金属の筒を広げて血栓を絡めとる ③吸引しながらステントで絡めとるという3つの方法がある。この治療には血管撮影装置を使用するが、同病院ではこの4月から最新の血管撮影装置を導入することが決まっている。「この装置の導入は福岡県内では2例目となります。この装置の導入によって、よりスピーディーで安全な治療を提供できるように becomes しょう」。

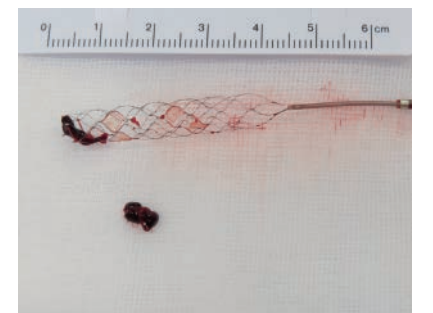
この治療がなかった時代は、高度の障害が残る寝たきりや死亡に至るケースが、昨今は、うまくいけば何の障害もなく退院できるようになる。

一方、残念ながらすべての患者が元の生活レベルに戻るわけではなく、麻痺などの障害が

残存した場合は積極的なリハビリテーションが必要になるが、同院には回復期リハビリテーション病床が設けられており、サポート体制も万全だ。

「脳血管内治療に携わる医者は、治療から血管の再開通までの時間をできる限り短縮するよう、日々研鑽を積んでいます。が、その時間を短縮するには限界があります。実は、いちばん時間がかかっているが、患者さんに症状が生じてから病院に到着するまでなんです。この時間を短縮するために、私たちは地域の医療知識レベルを引き上げる活動を行なっています」。

糟屋郡における医療環境は格段に向上しており、同院はその一端を担っているのだ。



血栓回収療法によって回収された血栓